

令和4年度 第1回 織田廣喜美術館運営協議会 会議録

1. 会議の名称 令和4年度 第1回 織田廣喜美術館運営協議会
2. 開催日時 令和4年7月5日（火）10：00～
3. 開催場所 織田廣喜美術館 市民アトリエ
4. 公開非公開の別 公開
5. 出席者 ※敬称略

(1) 出席委員

緒方 泉（会長）、坂本 留里子（副会長）、丸山 桃子、宮脇 教子、
坂田 統穂、栗野 麻里

(2) 欠席委員

三木一司

(3) 執行機関

教育長 木本 寛昭
生涯学習課長（館長）末永 康洋
課長補佐 上野 智裕
美術館係主査 有江 俊哉

(4) 指定管理者

(株)図書館流通センター統括責任者 下田 富美子
(株)図書館流通センター 松尾 梨沙

6. 傍聴人数 0人

7. 議題及び審議の内容

【議題】

- (1) 会長及び副会長の選出について
- (2) 第5次アクションプランについて
- (3) 令和3年度事業実績について
- (4) 令和4年度事業計画について
- (5) その他

【提出資料】

- (1) 第5次教育アクションプラン（美術館係）
- (2) 令和3年度事業総括表

- (3) 令和3年度事業経過報告
- (4) 令和3年度入館者内訳
- (5) 美術館の主な取り組み
- (6) 令和4年度行事予定表

【議題及び審議の内容】

- (1) 会長及び副会長の選出について

会長 緒方 泉氏、副会長 坂本 留里子氏に決定

- (2) 第5次アクションプランについて

事務局による説明。それに対する質疑応答。

《主な質問・意見等》

委員：アクションプランが基になって様々な美術館活動が行われていくので、常に立ち返るのはこのアクションプランである。これに基づいて本日も事業の説明となるし、本年度も新たな目標が出てきたので、このような教育普及活動や展覧会を実施したいという話の展開になってくると思う。目標はどれも数値であるが、これは致し方ない。評価というものを考えた時に、まずは数値目標が設定される。博物館、美術館では従前までは「よかった」、「楽しかった」などの主観的評価が多かったが、はっきりと説明できる資料となれば数値の評価や目標は当然出てくる。ただ、これだけで判断していくというものではない。例えば、小学校中学校の児童、生徒が美術館に来た時の生の声も併せて必要である。それは、評価が量的評価と質的評価と合わせて評価すものである。委員の皆さんも自分たちが利用する中で気づいた点を大切に記録していただくことで、より良い評価につながっていく。

- (3) 令和3年度事業総括（経過）について

事務局による説明。それに対する質疑応答。

《主な質問・意見等》

委員：昨年度については新型コロナウイルスの関係で緊急事態宣言が出るたびに、休館だとか、様々なプログラムが中止、延期となり進捗管理をする上では大変な一年であったと考える。しかし市民の方々は期待している

ので、その期待に対してどう応えていくかが大きな意味を持つ。令和3年度の事業報告を伺いながら大変な一年だったんだなどの印象を受けた。

委員：コロナ禍で残念な気持ちになることが多かったので、今年は色々と事業が開催されるようで安心した。

委員：昨年度は、「中原淳一展」と「県展」の監視員として来館者の声を直接聞く機会があった。そのことを踏まえ、協力できればと考えている。昨年の展覧会来場者の年齢層は広がったが、お話を聞いたのは高齢者の方が多かった。その中で交通の便や食事場所を気にされる声が多く、少しでも案内できるよう、もっと来場しやすく、利用しやすくなればと感じた。

委員：中学校は、美術館を筑豊地区中学校文化作品展で活用しており、昨年度も利用している。

委員：小学校では、美術館をふるさと学習の一環として「人、モノ、コト」と触れ合っていく学習で活用している。1年生、2年生段階から地域の良さを知って、親しんで誇りを持つという段階性を踏んでというカリキュラム作りに取り組んでいる。昨年度は、近くにありながら図画工作の教科での活用をという働きかけができていなかった。今後はカリキュラムに盛り込んでいかなければ、もったいないと思ったところである。点検評価の中には数値目標が示されているが、図画工作、美術は感受性の世界であり、それを学ばせていただけるいいものが近くにあり、活用できなかったことを反省している。

委員：社会資源の活用ができていないということはもったいない。感性を豊かにする場所としてもっと活用してほしい。子どもたちにとってもメンタルヘルスが非常に問われている。1月に開催された嘉麻市地域教材学習支援としての学習会が開催されたと報告があったが、このようなことが定期的に行われてくると先生方が美術館を知る機会となる。

事務局：学校が頻繁に美術館へ行くということは難しいだろうが、お互いにアンテナを高くして、美術館がふるさと学習の場として利用され、子どもたちの郷土への愛着心を高めていけるように学校とも連携を深めていかなければならないと思っている。

委員：文化協会などが美術館で展示を行った際には、素人の作品でも作品が映える。そして他の会場のように、大型のパネルなどを準備したりせず
に設営ができる美術館は展示作業が楽である。美術館を使って文化芸術祭

ができれば、会員の励みにもなるし、市民の皆さんに知っていただける機会も増える。

委員：いい空間に展示され、見栄えがよくなるのは活動する者にとって嬉しい。そして知人などへ案内をしたくなり、入場者の連鎖反応がおこる。子どもたちの作品展示でも父母、祖父母など家族で観に来る。そうなれば入場者数も上がる。コレクション展の入館者は少数でありこのことは今後の課題だが、様々な人を巻き込む展覧会にすると人が集まる要素が生まれる。

事務局：令和3年度を総括すると、非常に苦慮した1年であった。美術館は令和2年度からの、この2年間は創意工夫し、他の係と比較しても事業は成功したと考えている。県の方針に従い休館を余儀なくされたこともあるが、「中原淳一展」は数年前から「花村えい子展」からの関連性をもたせた企画であり、なんとか実施したかった。福岡県、嘉麻市の新型コロナウイルス感染拡大に対する方針により、結果的には半分の会期となったが、開催を実現できた。短い期間の中だが、宮崎県や熊本県などからのご遠来もあった。会場での声として先程発言があった食事の場所などの様々なサービスは、指定管理者を導入していれば上手くいったらという印象は持っている。地場の企業と手を結ぶことで、食事やお土産といったことが、直営での運営よりも指定管理者での運営の方が、経済効果という副産物が生まれる可能性が高くなる。道の駅などの利用や、農泊施設の「カホアルペ」での宿泊につながってくるだろうと令和3年度を終えて思った。新型コロナウイルスの影響はあったが、事業の中身としては、美術館は運営努力をしてくれたとの印象を持っている。

委員：展覧会のポスターは展覧会のことしか伝えていないが、宿泊や食事の場所などの情報を盛り込み伝えと、遠方から来訪された方が、福岡市内等へ行かれるよりも、嘉麻市内に宿泊するという選択行動につながる。ポスターなどの余白にQRコードを用いて観光などの情報を掲載し、展覧会とセットで紹介することで嘉麻市の楽しみ方も広がっていく。指定管理者が今後運営するならば、全国に先駆けてそのようなことをやってはどうか。

指定管理者：県外から嘉麻市に着任して身近に美術館がある、この町の人たちはすごいと感じた。美術館の近くに住んである人がいることを知り羨

ましくて仕方がない。だが、図書館の利用者や職員から美術館に行ったことがないという話を聞いて、驚いた。個人的にも美術館が好きであちこちの美術館を訪問し、観たい展覧会があれば東京までも行く。だから面白い事業をすれば、遠くからでも来てくれる人は必ずいると考えている。地元の人にも毎日のように来てほしいし、子どもたちにも大事にしてほしいと考えている。やりがいのあるところだという感想を持っている。

(4) 令和4年度事業計画について

指定管理者より説明。それに対する質疑応答。

《主な質問・意見等》

指定管理者：統括責任者の他に、美術館にサブチーフが常駐している。仕様書に基づき学芸員は2名配置し、内1名は資格取得中ではあるが教育普及の担当。合計6名で運営する。仕事は分業せず、誰でもなんでもやるので分掌はない。事業の計画はスタッフと打合せしながら統括責任者が行い、それに基づいて全体でやっていく。

委員：学芸業務には専門性は必要だが、その業務は学芸員がおこなうのか。

指定管理者：学芸員が行う。そしてその部分は自治体との共同で行うこととなっている。

委員：私自身も子どものころから織田廣喜美術館に来ていた。今でも影響を受けている展覧会もある。ここは、利用者と美術館との距離がとても近くて色々救われた。管理が変わってどうなるのか不安だったが、今話を聞くと、そのままいいところが引き継がれて、スタンプラリーなど他の所も巻き込んで、いい方向に向かうようで安心した。

委員：子どもの頃から親しんだという方が今回委員に入られて、その方が安心したという意見を述べていただいてよかった。

委員：高校生になる息子が、小学校の時から美術館の教育プログラムに参加しており、美術館と一緒に成長してきたという感じである。そして今でも興味は続いているので、他の子どもの頃から気軽に美術館に来てほしい。また7月からのノントン展のPRをできれば沢山してほしい。市民が開催されていることを知らないということにならないようにしてほしい。

委員：指定管理者に管理運営が移行し、利用の手続きや金額など変更はあるか？作品の鑑賞や所作などについて学習に関して、美術館に申請手続き

をするにはどのような手続きを行えばよいか。

事務局：学校利用の手続きなどは従前と違いはない。書式などの手続きは条例に従い提出をお願いするが、美術館の利用などについて何かあれば気軽に相談していただきたい。機構の説明をすれば、館長は生涯学習課長であり、指定管理者に管理、運営を丸投げしてはいない。美術館系の職員も常駐していないが、織田廣喜資料の取扱いや企画展など共同でおこなっていくので安心いただきたい。生きた教材としての美術館の活用についても適切に指定管理者と協議しながら進めていく。

委員：美術館が学校へ出向き、所作などの事前学習などをおこなう交流も効果的である。

委員：本日「ノンタン絵本の世界展」のことを知った。周知を美術館だけに任せるのではなく、学校も工夫をしなければならないと思った。校内の図書館での周知や、給食時間の放送で周知も考えられる。また夏休みにはサマースクールがあるので、終了後に連れてくるといった工夫もできると感じた。そのためには連携して早く情報いただきたい。

委員：サマースクールなどは前年に作成される年間事業計画に盛り込まれているので、美術館も情報を早く得るように情報共有していくとよい。

事務局：市内の生徒、児童においてはタブレット端末を配布しており、これを活用して事業の周知に生かせるかもしれないと考える。

委員：点検評価の数値目標は指標であって目標ではない。美術館は感覚を耕す世界である。来館者アンケートにも良い評価の回答があったと報告があった。そこも大切にすることがよい。学校経営においても非認知的側面が高ければ次へ繋がっていくしモチベーションも上がる。そういった視点での評価もしてゆきたいといつも思っている。美術館でも来館者の肯定的な回答比率やリピート率を数値化してはどうか。

委員：海外の事例だが、来館者が会場の出口に感想の付箋紙を張っていき、それが写真などに撮影されて拡散されていくものがある。生の声をいかに市民と共有できるかということも大切であり、現代ではそれが瞬時にできる。そういった利便性も活用していくとよい。

事務局：点検評価の達成目標の設定は、数値で表すとういのが行政では日常化しているが、美術館の評価指標はソフト面をどう見ていくかという基準を見出さなければ、点検評価における本当の意味での評価は出てこない。

委員：「ノントン絵本の世界展」は保育園、幼稚園への周知もしたらよい。

指定管理者：予定している。

委員：嘉麻教材学習支援は定期的に行われるのか？

事務局：本年度の計画は伺っていない。

委員：教育委員会からの申し出を待っているのではなく、こちらから呼びかけをしなければ継続されないのので、美術館側から呼びかけを。

事務局：5年間の委託期間において初年度である本年度は今までの引継ぎでもある。地域とのつながりやボランティアの育成は踏襲していただかなくてはいけない。一年間は事業としては引継ぎ、令和5年度からは独自の事業展開が図れると期待している。本日ご指摘があった内容については、積極的に子どもたちへアプローチして教材として活かせる美術館づくりに努めていきたい。また今後とも今年度の事業の進捗状況などをこの場で図っていただきたい。

(5) その他

説明、意見などなし。

閉会

この会議録は、緒方会長に確認していただきました。